



小傳

明治八年三月、横濱で生まれた。親の手許で育つただけで、何をどうと云つて研究もしない、「雜誌學問」と云つたやうな所だ。何か書きたいから「文庫」の投書家になり、「明星」の寄稿家になり、處女作の戯曲「上杉謙信」を「明星」に出したが、眞砂座で伊井峯が演じて大好評を博したので、大に乘氣になつて數種の作ができた。

明治四十一年に市川左團次が、洋行後二回目の興行に、「歌舞妓物語」を上演したので、史劇作家としての聲名が定まつたやうになつた。素人の作家の權威を、奥深い劇場の内部にまで到達せしめた道程については、かなり多大の經驗を持つてゐる。素人が先生になり、無報酬が包み金になつた。今日のやうに、作物に値さへあれば、無名作家の作でも直ちに上演されるやうになつた氣運を造つた功蹟の幾分は、確かにあると自分でも信じてゐる。

著作の戯曲、大小約百篇、その七割位は上場されてゐる。だが、本當に自信のある作はまだ無い、或は恐らくできないで終るかも知れない。(紫紅自記)

上演年表

- | | | | | | |
|---|--------|------------|----|------|---------------|
| 一 | 上杉謙信 | 明治三十九年五月 | 初演 | 於真砂座 | 伊井蓉峰村田正雄等によつて |
| 二 | 甕破柴田 | 明治四十年十月 | 初演 | 於東京座 | 東京毎日新聞文士劇によつて |
| 三 | 歌舞妓物語 | 明治四十一年三月 | 初演 | 於明治座 | 市川左團次一座によつて |
| 四 | その夜の石田 | 明治四十一年十一月初 | 初演 | 於東京座 | 東京毎日新聞文士劇によつて |
| 五 | 初白髪 | 大正十一年二月初 | 初演 | 於新富座 | 中村歌右衛門一座によつて |

跋

黙阿彌翁の時代物や、櫻痴居士の史劇といふものに、心の底に怒りを懐いた彼れは、處女作「上杉謙信」をはじめ、數種の戯曲を書いた。史實を尊重し、そしてそれに捕らはれぬやう、その時代の用語に近き一種の白をこしらへたこと、而して現今の思想をその上に漂よはしたこと。今にして思へば、彼れの努力の七八分は、何にもならぬ苦勞であつた。だが彼れの張つた陣は、少くも劇場内の人達に、素人に對しての驚異と、幾分の尊敬とを與へた。これが今日になつて、消えた努力に對しての、明きらめが平氣でゐられるわけである。

柴田勝家がそんなことを云ふものか、結城秀康があんな口をきくものか、こんな小事が新らしい作を、奈落の底へ陥落させた。頼朝が「權利」を叫んだり、虎御前が「色魔」と喝破しても、反感を持たない時代から思ふと、今昔の感がある。

彼れは壞したのだ、芝居國の言語を時代の原始に歸らせたのだ、而して今の自由語の世界を造

る素因を、知らずして養成したのだ。彼れとは私のことである。

編輯者によつて選ばれた、私の五つの作も、その白に苦心した足利末期から徳川上期のものばかりであつたのも、何とやらほゞえまれる。

大正十三年十二月廿六日

山崎紫紅

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月一日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青々
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番